

---

研究ノート

---

マレーシアにおける大学生の結婚と出生に関する意識  
—マラヤ大学学生意識調査16年間の調査結果より—

店 田 廣 文<sup>a</sup>

Student Survey on Marriage and Birth in Malaysia  
—Analysis of the UM (University of Malaya) Student Surveys—

Hirofumi Tanada<sup>a</sup>

(<sup>a</sup>Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : November 20, 2015 ; Accepted : January 13, 2016)

Abstract

Low fertility and delayed marriage are becoming one of the most important social and political issues faced by Japan and the many countries of East and South-east Asian countries. In the present research note, referring to the general trends in marriage and birth in Malaysia, the time-series trends of the UM University of Malaya students' consciousness on marriage and birth from the year 2004 to 2014 were examined. In conclusion, the future trend of ethnic composition regarding the population of Malaysia will be described.

はじめに

日本では、未婚化、晩婚化による少子化が将来にわたる大きな社会問題かつ政治問題となっており、子育て、ワークライフバランス、女性活躍推進などに関する政策対応がなされている。一方、東アジアや東南アジア（本稿では「東アジア」と総称するが、括弧なしの場合は従来の地域区分である）においても、合計出生率が1.3以下の「超少子化国」といわれる極めて低い出生率の国々が出現し、<sup>1</sup>台湾は2010年に0.895という「恐るべき低出生率」となり、2009年の韓国、シンガポールもそれぞれ、1.15、1.22と「超少子化国」とどまっているという状況が報告されている。<sup>2</sup>「東アジア」には、カンボジア、ラオス、フィリピンなどのように、依然として高い出

生率を維持している国々もあるが、いわゆる人口置換水準を下回る出生率を示している国々が増えてきており、全体として少子化の動向が明らかになりつつある。「東アジア」の世界経済における重要性が高まっている現在、このような地域全体における少子化現象を確認し、今後の人口学的動向と「東アジア」の社会経済状況への影響を検証していくことが今後は必要であろう。

本稿では、東南アジアの「イスラーム社会」であるマレーシアを取り上げて、同国における少子化の動向と、とりわけ若者の結婚と出生に関する意識について検討し、今後の人口変動に対する影響を確認することとする。同国を取り上げる理由のひとつは、筆者が指導する早稲田大学人間科学部の専門ゼミがマレーシアのマラヤ大学 (University of Malaya) 学生意識に関するアンケート調査 (マラヤ大学学生

---

<sup>a</sup> 早稲田大学人間科学学術院 (Faculty of Human Sciences, Waseda University)

意識調査と略称)を1990年代後半から16年間にわたって実施して収集した関連データがあることである。また、マレーシアが多民族国家として、マレー系、華人系、インド系を主要民族として擁しており、民族ごとの少子化現象の一端を比較できることにもある。なお、マレーシアは、東南アジアではシンガポールに次ぐ経済発展の実績を有し、2020年の先進国入りを目標としており、「イスラム金融」や「ハラール認証」を軸に、イスラム世界のひとつの中心を目指した国造りにも積極的である。

はじめに、「東アジア」とマレーシアにおける結婚と出生の推移を確認し、マラヤ大学学生意識調査を概観した後に、継続的に実施してきた調査項目のうち、大学生の結婚や出生に関する意識に関する結果を材料として、当該期間におけるマレーシアの社会変動の中での、学生意識の経年的変化を追跡してその意義を検討することにした。筆者は、2005年の拙稿において、前年までのマラヤ大学学生意識調査データの検討を行っており、<sup>3</sup>本稿はその後の10年間の変化を視野に入れて、マラヤ大学学生の結婚と出生に関する意識を再考するものでもある。

## 1. 東アジアの結婚と出生

2000年代初め、それまでは「皆婚社会」が当たり前であったアジアのほとんどの社会で、結婚の状況が大きく変化してきたことが指摘された。1970年から1990年の変化を30代前半の女性の未婚率によって見ると、例えば台湾では2%から11%へ、タイでは8%から14%へ、半島部マレーシアでは6%から15%へ上昇というトレンドが観察された。このような未婚率の上昇という変化は、多かれ少なかれアジアの多くの国で観察されていた。とりわけ、東南アジアの華人系人口については「結婚からの大なる逃避」という言葉でこの傾向が指摘されたが、このような特定の人口グループを超えて、タイやミャンマー、さらにブルネイやシンガポール、マレーシアのマレー系の人口グループに対しても一般化できるような表現となっていると言われていたのである。また、特に大都市部でその傾向が強くなり、40歳代後半での未婚率も上昇し、単なる晩婚化だけでなく生涯未婚率が上昇していることが示された。<sup>4</sup>

アジアの国々は、1950年代から21世紀にかけて著

しい人口増加に直面し、1950年代前半には、「東アジア」全体で年率2%前後の高い増加率を示した。東南アジアでは「人口爆発と呼ばれたほどに激しい」増加を経験した国もあったほどである。このような人口増加の趨勢も東アジアでは1970年代頃までで収まり、また東南アジアでも1980年代頃までみられた人口の爆発的増加も収束に向かっている。<sup>5</sup>

国連の2015年の「世界人口予測」によると、<sup>6</sup>アジア全体の合計出生率(合計特殊出生率)は、1970-75年段階の5.06から2000-2005年段階の2.39まで低下し、2010-2015年段階に至ると人口置換水準に近い2.20まで低下したものと推計されている。アジアには前述のような「超少子化国」もあれば、依然として高い出生力を持った国々も存在しているが、対象としている「東アジア」では半数以上の国において、人口減少のひとつの要因となる、人口置換水準を下回るレベルの合計出生率が推計されている(2010-2015年段階)。それらは以下の通りであり、中国(1.55)、香港(1.20)、韓国(1.26)、北朝鮮(2.00)、日本(1.40)、ブルネイ(1.90)、カンボジア(2.70)、インドネシア(2.50)、ラオス(3.10)、マレーシア(1.97)、ミャンマー(2.25)、フィリピン(3.04)、シンガポール(1.23)、タイ(1.53)、ベトナム(1.96)と報告されている。カンボジア、ラオス、フィリピン、インドネシアを例外とすれば、「東アジア」では、少子化の動向は、アジア全体よりも一層強く表れているのである。

「東アジア」では未婚化や晩婚化が進行していること、および低出生率への変化を看取することができ、マレーシアでも後述するように未婚化や晩婚化が進行している。因みに、2004年の「世界人口予測」では、マレーシアの合計出生率は2015-2020年段階2.19、2030-2035年段階1.85、したがって人口置換水準以下になるのは、2030年前後と推計されていた。しかし、2015年の「世界人口予測」では、2010-2015年段階で既に1.97と推計されており、10年前の予測よりも早い段階で、人口置換水準以下になったことになる。次節では、マレーシアの結婚と出生の状況をより詳しく確認してみよう。

## 2. マレーシアの結婚と出生

マラヤ大学学生意識調査の結果を紹介する前

に、マレーシア社会の基本的構造を人口統計や政府統計を利用して、概観しておきたい。マレーシアは、1957年にイギリス領マラヤ連邦が独立した後、1963年にシンガポール、ボルネオ島のサバ、サラワクを加えて、マレーシアとして独立した。しかし、1965年にシンガポールが分離独立し、現在に至っている。立憲君主制国家であるが、実質的には首相を最高指導者とする議会制民主主義国家として運営されている。国王はスルタン（イスラームの首長）を擁する9つの州から互選で選ぶことになっており、任期は5年である。国土は、マレー半島の西マレーシア、ボルネオ島の東マレーシアからなり、面積は33万平方キロメートルである。

マレーシアの人口は、人口住宅センサスによれば、1980年1300万、2010年2800万であり、人口増加率は、これまで2%を超えており、今後もしばらくは人口増加が継続するものと考えられる（表1）。2015年の「世界人口予測」によると、2015年のマレーシア人口は、3000万であるが、2050年には4000万と推計されている。一方、平均世帯規模は、一貫して縮小しており、2000年には、世帯あたり4.62人であったが、2010年には4.31人まで低下した。この背景には、出生率の低下があり、粗出生率は、1980年の30.6から2010年には17.2となり、合計出生率も同期間中に、4.0から2.1まで低下している（表2）。

マレーシアの社会経済状況を見ると、一人あたりのGDPは、1987年から2005年の間にほぼ倍増し、<sup>7</sup>2014年現在は、11,200米ドルで、シンガポール、ブルネイに次ぐ水準にある。<sup>8</sup>産業構造も大きく変化してきており、1970年から2000年の間に、農業従事者は50%強から15%まで低下し、製造業従事者は8%から29%へ増加し、都市人口率も同期間中に28%から62%に上昇している。<sup>9</sup>

表1. マレーシアの人口構造

西暦年	人口	年増加率(%)	性比	平均世帯規模(人)
1980	13,136,109	n/a	101	5.22
1991	17,563,420	2.64	102	4.92
2000	22,198,276	2.60	103	4.62
2010	27,565,821	2.17	105	4.31

資料:

Department of Statistics, Malaysia, *Population and Housing Census of Malaysia 2010: Preliminary Count report*, Nov. 2010

表2. マレーシアの人口動態統計

西暦年	粗出生率	粗死亡率	合計出生率	参考:日本の合計出生率
1980	30.6	5.3	4.0	1.75
1991	27.6	4.5	3.4	1.53
2000	23.4	4.5	3.0	1.36
2005	18.5	4.5	2.4	1.26
2010	17.2	4.6	2.1	1.39
2012	17.2	4.6	2.1	1.41
2013	n/a	n/a	n/a	1.43

資料:

Department of Statistics, Malaysia, *Population Statistics(time series pop Malaysia.pdf)*, 厚生労働省、人口動態総覧の年次推移 (<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai14/dl/toukeihyo.pdf>), 2015年8月28日参照。

## (1) 結婚

マレーシアの結婚パタンの変化は著しい。1970年と2000年の男女初婚平均年齢を見ると、男性が25.5歳から28.6歳に、女性が22.0歳から25.1歳へと上昇した。また同期間の25-29歳の男女の未婚率も大きく増加し、男性では32%から54%へ、女性では13%から29%へと2倍以上になった。結婚行動をみると、民族間や地域による違いは存在するものの、全般的傾向としては結婚年齢の上昇と未婚率の上昇を指摘することができる。<sup>10</sup>

マレーシアにおける晩婚化と未婚率の上昇は、教育水準の上昇と女性の労働力参加、およびライフスタイルの変化もその背景にあるとされており、これら晩婚化や未婚化という結婚パタンの変化は継続的なものとなると考えられている。初婚年齢や未婚率を民族別に集計した結果では、マレー系の初婚年齢が相対的に若いこと、未婚率が相対的に低いことが指摘できる。<sup>11</sup>因みに、民族別の初婚年齢に関する変化を1970年から2000年について確認すると、表3のとおりである。3つの民族ともに、初婚年齢は上昇傾向にあるが、男女ともにマレー系、インド系、華人系の順に相対的に若いことが指摘できる。<sup>12</sup>このような結婚行動における民族別の結婚年齢や未婚率の格差は、出生タイミングや出生数にも影響を与えることになろう。

ところで、学歴別・民族別・性別に、初婚年齢を集計して見ると、1991年では、いずれの民族・性においても、高学歴ほど初婚年齢は高いことが明らかであったが、2000年には様相が変化している。マレー系とインド系の女性の初婚年齢に関して、学歴による年齢格差が非常に小さくなったことが驚きをもって指摘されている。これについては、マレー系、イ

インド系女性の社会経済的地位の上昇、つまり高学歴化が女性にとっても当たり前の事となってきたことが影響していると考えられている(表4)。<sup>13</sup>

マレーシアの人口住宅センサスによる分析では、その後の平均初婚年齢の動向は男女で異なり、2000年と2010年を比較すると、男性では28.6歳から28.0歳へ低下し、女性では25.1歳から25.7歳へ上昇していると報告されているが、<sup>14</sup> 現段階ではその影響や要因の分析はまだ行われていない。

表3. 平均初婚年齢

西暦年	マレー系		華人系		インド系	
	男	女	男	女	男	女
1970	24.7	21.0	27.4	24.2	25.0	21.7
1980	26.7	23.2	28.2	25.1	26.8	24.2
1991	27.5	24.6	29.8	26.3	28.3	25.5
2000	27.9	24.8	30.6	27.0	28.8	25.4

資料:

Tey Nai Peng, Understanding marriage and divorce trends in Peninsular Malaysia, *Changing Marriage Patterns in Southeast Asia* (Jones, G. et.al. eds.),2011. Table 10.1

表4. 平均初婚年齢(学歴・性・民族別) 1991/2000年

西暦年・学歴	マレー系		華人系		インド系	
	男	女	男	女	男	女
1991						
合計	27.5	24.6	29.8	26.3	28.3	25.5
初等	27.1	22.6	29.7	23.6	26.7	23.3
中等	27.3	24.6	29.9	26.3	29.1	25.6
高等	27.3	27.5	30.1	29.4	29.5	29.4
2000						
合計	27.9	24.8	30.6	27.0	28.8	25.4
初等	28.9	23.1	31.3	23.8	27.4	22.8
中等	27.7	23.8	30.6	25.5	28.6	24.5
高等	27.7	25.5	30.4	29.1	30.1	24.1

資料:

合計欄

Tey Nai Peng, Understanding marriage and divorce trends in Peninsular Malaysia, *Changing Marriage Patterns in Southeast Asia* (Jones, G. et.al. eds.),2011. Table 10.1

学歴別

Tey Nai Peng, Trends in Delayed and Non-Marriage in Peninsular Malaysia, *Asian Population Studies*, 3-3, 2007, Table3. P.248  
1991年・2000年の人口センサス2%サンプルデータからの集計

## (2) 出生

マレーシア全体の合計出生率については、2015年の「世界人口予測」では、2.45(2000-2005年段階)、2.07(2005-2010年段階)、1.97(2010-2015年段階)という変化が推計されている。

以下では、マレーシアの出生に関する推移を改めて振り返ってみたい。<sup>15</sup> 多民族国家マレーシアでは、民族ごとの出生率格差が顕著であり、1967/1997年

の出生率を確認してみると、マレー系は、5.4/3.8、華人系は、5.2/2.5、インド系は6.4/2.6という格差がある。<sup>16</sup>このような出生率格差は、社会・文化的、宗教的、経済的・政治的ファクターなどの複合的な要因によって規定されている。例えば、現在のマレー系に見られる出生率の相対的高さは、社会・文化のおよび宗教的ファクター(イスラーム)等だけによって説明されるのではなく、「ブミプトラ政策」による就業、就学などにおけるマレー系優遇政策が影響しており、経済的・政治的ファクターの効果として説明できるであろう。これに対して、華人系やインド系は、もともと都市部居住の割合が高いため、都市部での就業を選択する傾向があり、したがって育児の機会コストが相対的に高くなる。このため、より効果的(あるいは近代的)な避妊方法の使用が高率であると同時に、未婚化・晩婚化を促進していると考えられる。

とはいえマレーシアにおける教育水準の上昇、都市化、産業化、女性の労働力参加などの、いわゆる近代化という大きな社会変動は、前述した国連の推計などにも現れているように、すべての民族を通じて出生率の低下をもたらしており、今後も社会全体の出生率低下は継続するものと推計されている。現在のところマレー系の出生率が高いが、イラン、インドネシア、バングラデシュの出生率低下に見られるように、<sup>17</sup>宗教的ファクター(イスラーム)の影響力は弱まっていると考えられる。社会・経済発展にともなってマレーシア国内のイスラーム規範が強いついわれる半島マレーシア東部のクランタン、トレンガヌ両州でも合計出生率は低下していくとも予測されている。<sup>18</sup>同様に、華人系、インド系の出生率も低下すると見込まれており、とくに教育水準の上昇が大きな効果を持ち、先にみた未婚化・晩婚化を通じて出生率低下に寄与するであろう。

マレーシアの結婚と出生についてまとめると、全般として未婚化・晩婚化と、出生率低下の流れは避けがたいと思われる。しかし、結婚と出生の民族間格差については継続する可能性がある。1990年代半ばの予測では、2021年までにブミプトラ(原住民及びマレー系を含むマレーシア人)が全人口の70%を占めることになり、華人系やインド系の比率がそれぞれ21%と6%に低下するものとされていた(1991年には、各比率は61%、28%、8%)。<sup>19</sup>そして、

最新の2010年人口住宅センサス結果による民族別の構成比は、ブミプトラ67.4%、華人系24.6%、インド系7.3%へと変化しており、<sup>20</sup>その予測にそった推移となっている。

### 3. マラヤ大学学生の結婚と出生

#### (1) 意識調査の概要

本稿で紹介する調査データは、1997年度に開始したマレーシアの首都クアラルンプル所在のマラヤ大学学生意識調査によるものである。本調査は、ほぼ毎年度実施されており、早稲田大学人間科学部の専門ゼミの調査実習の一環として、教員・学生による企画から実査、まとめと報告まで、一年間のゼミの中で完結するものである。1997年度の調査は、質問項目に関するガイドラインを使用した英語によるインタビュー調査であるが、それ以降は、原則として英語の質問紙を利用した他記式調査である。ただし、2010年度の調査は自記式調査として実施した。表5にこれまでの調査主題と調査日程、回答者数、調査参加学生数をまとめ、表6には、複数回の調査で取り上げられた主要な質問項目を列挙し、調査年度を明記した。

調査方法は、英語の質問紙を使用した個別面接調査であり、対象者抽出は機縁法により、キャンパス内で声をかけ、調査に応じてくれた学生を対象とする有意抽出法である。マレーシアは、マレー系、華人系、インド系、その他の土着の民族系などからなる、多民族国家である。そこで、対象者抽出に当

たっては、いわばクォータ法に近い手法をとり、マレーシアの民族別人口の比率を参照しながら、各民族の抽出数を教員がコントロールして、回答者数の性別や民族別の偏りを出来るだけなくすようにしてきた。学生調査員の自由な抽出に任せると、調査に応じてくれやすい女子学生や、声をかけやすい華人系の学生の数が増える傾向がみられるため、抽出する学生の属性を指示するようにしたのである。本調査は、無作為抽出法を採用しておらず、またマラヤ大学学生を代表するようなサンプリングに基づく調査は、マラヤ大学の学生個人情報提供の制限、時間やコストの面から不可能であり、本調査の分析結果は、その意味で限界を有している。しかし、前述したように、継続して採用している質問項目があり、民族別に調査結果の分析をすることに意義を見だし、民族別意識の経年変化を捉えることを意図した。

16年分の調査回答者の数は、各年の調査員である学生数によって左右されており、最小は調査1年目の42名、最大は調査14年目の358名である。なお、2010年度の調査は、われわれ教員・学生が、現地に赴いて実施されたものではない。事情により、実査はマラヤ大学教員に委託しており、調査方法は、集合調査法かつ自記式調査を採用している。そのため、男女比や民族別構成において、他の年度とは大きな違いがあることをあらかじめ指摘しておきたい。

回答者の男女比は、サンプリング方法に影響されて、年度によってバラツキがあるが、ほぼ半々である年度が多いとは言えよう。回答者の平均年齢は、およそ20～21歳の範囲にある。民族別の構成も大

表5. 調査の概要 — 1997年～2014年 —

調査の表題	調査日程	回答者数	参加学生数
Social Survey on Lifestyle of UM Students in Kuala Lumpur, Malaysia	1997年10月30日～11月3日	42人	4人
Social Survey on Family and Household of UM Students in Kuala Lumpur, Malaysia	1999年11月4日～11月9日	124人	10人
Marriage Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2000	2000年11月4日～11月9日	205人	7人
Gender Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2001	2001年11月8日～11月13日	125人	6人
Gender and Sexuality Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2002	2002年10月31日～11月5日	279人	7人
Nation and Race (Ethnicity) Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2003	2003年11月12日～11月18日	218人	11人
Marriage Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2004	2004年9月2日～9月9日	317人	10人
Marriage Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2005	2005年9月7日～9月13日	223人	7人
Youth Culture, Life Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2006	2006年8月23日～8月30日	290人	13人
Lifestyle, Ethnicity, Abundance Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2007	2007年8月23日～8月30日	333人	13人
Environments and Life Survey of UM Students in Kuala Lumpur 2008	2008年8月28日～9月3日	245人	13人
Culture and Lifestyle Survey of University Students in Kuala Lumpur 2009	2009年8月27日～9月2日	229人	12人
Multicultural Society Survey of University Students in Kuala Lumpur 2010	2010年10月1日～10月31日	203人	6人
Survey on Family in the Multi-Cultural Society of UM Students in Kuala Lumpur 2012	2012年9月18日～9月21日	358人	10人
Survey on Ethnicity and Religion among UM Students in Kuala Lumpur 2013	2013年9月9日～9月12日	355人	10人
Survey on Ethnicity and Religion among UM Students in Kuala Lumpur 2014	2014年9月8日～9月12日	345人	10人

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。

表6. UM調査項目 1997年～2014年

西暦	性	年齢	民族	兄弟姉妹の数	父の職業	出身州	収入	結婚希望年齢	希望子供数	配偶選択条件	他民族との結婚	ライフコース	生活目標	アイデンティティ	働く意味	PC所有	携帯所有	生活水準	生活満足度	国家・民族利益	好きな国・嫌いな国
1997	○	○	○		○											○	○				
1999	○	○	○		○	○	○	○	○	○											
2000	○	○	○		○		○	○	○	○		○									
2001	○	○	○			○				○			○								
2002	○	○	○			○				○											
2003	○	○	○			○				○	○			○						○	
2004	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○								
2005	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○								
2006	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○							○	○
2007	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○				○	○		
2008	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○		○	○			○
2009	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○		○						○
2010	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○											
2012	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○								○	
2013	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○					○	
2014	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○							○	○		○

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査票より筆者作成。

表7. 学生の基本的属性 (性、年齢、民族)

調査年	男	女	計(回答者数)	平均年齢	民族別構成比率				計
					マレー系	華人系	インド系	その他	
1997	31.0	69.8	42	n/a	33.3	38.1	11.9	16.7	100
1999	53.2	46.8	124	n/a	44.4	40.3	8.1	7.3	100
2000	48.8	51.2	205	n/a	43.9	33.7	11.2	11.2	100
2001	47.2	52.8	125	n/a	49.6	27.2	13.6	9.6	100
2002	49.5	50.5	279	n/a	60.9	25.8	4.7	8.6	100
2003	48.6	51.4	218	n/a	46.8	35.8	10.1	7.3	100
2004	48.9	51.1	317	21.3	51.7	32.3	12.0	4.1	100
2005	49.8	50.2	223	20.9	51.6	33.6	10.3	4.5	100
2006	42.4	57.6	290	20.8	56.6	33.8	7.9	1.7	100
2007	56.5	43.5	333	21.0	59.5	29.7	7.8	3.0	100
2008	53.5	46.5	245	21.0	53.1	34.7	7.8	4.5	100
2009	40.6	59.4	229	20.4	47.2	37.6	11.8	3.5	100
2010	30.0	69.5	203	20.9	28.6	65.0	4.9	1.5	100
2012	51.4	48.6	358	20.7	57.0	30.2	10.6	2.2	100
2013	44.5	55.5	355	21.6	45.4	37.5	13.0	4.2	100
2014	49.3	50.7	345	21.2	50.1	32.2	13.0	4.7	100

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。

表8. 平均世帯人数

調査年	世帯人数				全体
	マレー系	華人系	インド系	その他	
2007	7.45	6.31	6.72	7.30	7.05
2008	7.57	5.93	6.05	7.36	6.87
2009	6.38	5.28	6.00	5.75	5.90

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。

きなバラツキがあることは、別表のとおりである(表7)。

世帯規模について、大半の調査では世帯に属する成員の有無を個別に確認する方式となっており、必ずしも世帯人数を集計する事を行わなかった。しかし、2007年度からの3カ年の調査では、世帯人数に関する調査項目を設けており、ここでは当該データを紹介する(表8)。世帯人数は、2007年の7.05人、2008年の6.87人、2009年の5.90人となっている。2010年のマレーシア人口住宅センサスによれば、平

均世帯人数は、4.31人であり、調査回答者の世帯は、各年ともこの数値を大きく上回っている。われわれの調査では、いわゆる家族だけでなく、親族等で世帯に同居する人員も含めていることが影響しているものと思われる。全体の平均世帯人数の増減はあるものの、3年度ともに、マレー系の世帯人数がもっとも多く、6.4人から7.5人という規模である。一方、華人系の世帯人数がもっとも少なく、マレー系との差は歴然としている。

## (2) 結婚に関する意識

大学生の結婚観については、2005年の拙稿において取り上げたので、その結果を紹介しておきたい。<sup>21</sup>

2001年の調査では、「結婚するべきか否か」を対象者全員に尋ねた。「結婚するべき」と「結婚した方がよい」が、男性については86.4%、女性については87.2%であった。日本の厚生労働省人口問題研究所による出生動向基本調査には、日本人の独身者に結婚意思を問う質問があり、「いずれ結婚するつもり」と回答した独身者男女は、1997年と2002年の調査によると、86～89%の範囲であった。一方、「一生結婚するつもりはない」との回答は、5～6%ほどで、「不詳」は6～8%ほどであった。<sup>22</sup>具体的な質問項目は異なるが、マラヤ大学学生の調査と日本の調査結果からは、「皆婚社会」といわれてきた日本やマレーシアにおける結婚観を把握することができた。

マラヤ大学学生の宗教別に回答を集計すると、ほとんどがマレー系であるムスリム(イスラーム信者)では95%ほどが男女ともに「結婚するべき」と「結婚した方がよい」と回答したが、華人系が多い仏教徒とクリスチャンでは男女とも21～26%の範囲で「結婚しなくともよい」という回答がみられた。

2004年調査では、本人の結婚意思について「ある程度の年齢までに結婚するつもり」あるいは「理想的な相手がみつかるまで結婚しなくともかまわない」のいずれか尋ねてみた結果、前者が35.3%、後者が64.7%であった。日本の独身者男女に関する出生動向基本調査では、「結婚するつもり」と回答した人のみについて同様の質問をおこなっており、若干形式が異なる。2002年出生動向基本調査では男性が「ある程度の年齢までに・・・」48.1%と「理想的な相手が・・・」50.5% (不詳1.5%)、女性が43.6%

と55.2% (不詳1.3%) であり、日本の独身者のほうがマラヤ大学学生よりも、年齢規範に敏感と思われる。マラヤ大学学生を民族・宗教別に集計すると、マレー系とムスリムが日本人同様、相対的に年齢規範に敏感のようである。逆に華人系と仏教徒は「理想的な相手が・・・」と回答する割合が4分の3に達していることが特徴的であった。

次に、結婚希望年齢を上げる。この項目は、表9のように2004年から2014年までの間の9年分のデータがある。2003年までの結婚希望年齢のデータは、選択肢を用意して回答してもらったので、データの性格が異なるため、本稿では取り上げなかった。まず、回答者全体の傾向を9年間についてみると、結婚希望年齢は、ほぼ27歳で安定しており、ほとんど変化していない。民族別に見ると、マレー系男性は低下傾向にあるように見えるが、華人系、インド系ではあまり変化はない。一方、マレー系女性は横ばいであるが、華人系女性、インド系女性では若干上昇しているようにも思われる。

前述の通り、マレーシア全体の平均初婚年齢は、2000年と2010年を比較すると、男性では28.6歳から28.0歳へ低下し、女性では25.1歳から25.7歳へ上昇しているとの人口住宅センサス結果による報告があったが、マラヤ大学学生の結婚希望年齢の動向の一端がこの変化を反映しているようにも思われる。

## (3) 出生に関する意識

マレーシアの合計出生率は現在、2.1 (2012年) である。マラヤ大学学生が希望している子ども数についても9年間の調査データがある (表10)。9年間を通して、全体の平均は、3.2～4.0人の範囲にある。民族別にみると、いずれの年度についてもマレー系が4人を超えているのに対して、華人系、イ

表9. 結婚希望年齢

調査年	マレー系			華人系			インド系			その他			全体
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
2004	28.2	25.9	27.0	29.2	27.6	28.4	28.8	26.5	27.5	28.6	28.0	28.4	27.6
2005	27.0	26.1	26.6	28.4	27.7	28.0	28.1	26.5	27.2	30.0	25.8	27.9	27.2
2006	27.2	25.9	26.5	28.4	27.6	28.0	26.7	26.2	26.4	32.7	25.5	29.8	27.0
2007	27.1	25.8	26.5	28.4	27.5	28.0	28.6	26.6	27.4	26.6	26.2	26.4	27.0
2008	27.3	26.0	26.7	28.9	27.5	28.3	27.1	26.8	26.9	28.4	27.0	28.0	27.3
2009	27.0	25.8	26.3	28.5	27.3	27.9	28.2	26.9	27.2	28.3	27.0	27.6	27.0
2012	26.9	25.4	26.2	29.0	27.6	28.4	28.8	27.2	28.1	28.0	26.0	27.3	27.0
2013	26.4	25.8	26.1	28.5	28.2	28.3	28.6	27.3	27.7	27.8	26.6	27.1	27.2
2014	26.0	26.0	26.0	28.7	28.1	28.4	29.1	27.3	28.2	28.4	27.5	27.9	27.1

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。

インド系ともに、平均すると2.5人前後の子ども数を希望していることが明らかであり、マレー系、ひいてはムスリムの学生が希望する子ども数の大きさが際立っている。民族ごとに男女別の希望子ども数を見ると、マレー系、華人系、インド系ともに、男性のほうが若干、希望子ども数が多い傾向がある。

マレーシアの平均世帯人数は、前述の通り、4.62人(2000年)から4.31人(2010年)へと縮小している。本調査では、2007年から2009年まで世帯人数を確認できるが、それによると、年順に、7.05人、6.87人、5.90人であり、かなり世帯規模が大きいことは前述のとおりで、これらは家族以外の世帯員を含めた結果と思われる。

本調査では、希望子ども数とは別に、学生本人が所属している家族(定位家族)における自分の兄弟姉妹の数も調べている(表11)。2004年は、1.7人(兄弟)と1.6人(姉妹)であり、学生本人を含めれば、子ども数は、平均4.3人となる。2008年までは、ほぼ同程度の兄弟姉妹数が回答されているが、2009年以降は兄弟数、姉妹数とも少なくなっており、2013年と2014年のデータでは、兄弟姉妹を合わせて2.4人ほどであり、学生本人をふくめれば、子ども数は、平均3.4人程度であり、2004年と比べれば、

一人くらい少ない兄弟姉妹数となった。これはマレーシア全体の平均世帯人数の減少傾向にそった変化であるのかも知れない。

民族別に見ると、兄弟姉妹数が最も多いのは、マレー系であり、ついでインド系、華人系という順で兄弟姉妹数は減少する。2004年の場合、民族別に順に、兄弟姉妹の合計数は、およそ4.0人、2.7人、2.5人であり、2014年の調査データでは、順に、およそ2.6人、2.1人、2.0人と、マレー系と、その他の民族との格差は減少しており、マレー系の世帯人数の減少傾向が著しいように考えられる。

まとめにかえて

マレーシア全体の結婚と出生の動向をふまえて、マラヤ大学学生の結婚と出生に関する意識と兄弟姉妹の数などを紹介してきた。本調査のデータは、マラヤ大学学生全体の意識を代表するものとは言えないことは初めに述べたとおりである。その上で、2004年から2014年の連続した調査結果の推移を改めて確認しておきたい。

マレーシアにおける高学歴者の平均初婚年齢を見ると、マレー系が華人系、インド系に比して若いこ

表10. 希望する子どもの数

調査年	マレー系			華人系			インド系			その他			全体
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
2004	4.4	4.0	4.2	2.9	2.5	2.7	3.0	3.2	3.1	4.6	3.4	4.2	3.6
2005	4.3	3.8	4.0	2.9	2.7	2.8	2.9	2.8	2.8	4.4	3.4	3.9	3.5
2006	4.7	4.0	4.3	2.5	2.5	2.5	2.3	2.1	2.2	3.7	3.5	3.6	3.5
2007	4.9	4.2	4.6	3.1	2.4	2.8	3.2	2.4	2.7	6.4	3.0	4.7	4.0
2008	4.2	4.1	4.2	2.5	2.2	2.4	2.6	2.3	2.4	3.8	3.7	3.7	3.4
2009	4.6	3.9	4.2	2.7	2.3	2.5	2.7	2.4	2.4	3.3	3.0	3.1	3.3
2012	4.2	4.1	4.2	2.4	2.2	2.3	2.6	2.3	2.5	4.4	3.8	4.2	3.4
2013	3.9	4.1	4.0	2.5	2.4	2.5	2.7	2.2	2.4	4.6	3.2	3.7	3.2
2014	4.6	3.9	4.2	2.5	2.2	2.3	2.5	2.2	2.3	3.8	4.0	3.9	3.4

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。

表11. 兄弟姉妹の数

調査年	兄弟の数					姉妹の数				
	マレー系	華人系	インド系	その他	全体	マレー系	華人系	インド系	その他	全体
2004	1.96	1.39	1.39	2.69	1.7	1.99	1.12	1.32	1.23	1.6
2005	1.98	1.16	1.52	2.20	1.7	1.89	1.52	1.22	1.40	1.7
2006	2.04	1.14	1.22	2.00	1.67	1.96	1.49	1.30	2.40	1.76
2007	1.97	1.35	1.73	2.30	1.78	1.91	1.26	1.27	1.70	1.66
2008	2.17	1.08	1.11	1.80	1.69	1.89	1.34	1.84	1.80	1.69
2009	1.56	1.12	1.24	1.63	1.36	1.78	1.08	1.60	1.00	1.47
2012	1.62	1.00	0.92	1.00	1.35	1.60	1.04	1.30	0.88	1.38
2013	1.50	0.94	0.82	1.38	1.19	1.44	1.10	1.05	0.85	1.23
2014	1.37	1.11	0.89	1.00	1.21	1.25	0.97	1.16	1.38	1.15

資料: マラヤ大学学生意識調査・調査結果より、筆者作成。



とは明らかである。本調査における結婚希望年齢においても、同様の傾向がはっきりと現れており、マレー系は若年での結婚を希望している。更に2004年から2014年までの推移を見ると、マレー系が若干ながら若年化の傾向があるのに対して、華人系、インド系では、横ばい、あるいはやや高齢化の傾向が見られることが指摘できる。結婚希望年齢に関する調査結果という限定付きであるが、マレー系のマラヤ大学学生の場合は、晩婚化とは無縁ということであろう。

マレーシア全体の平均世帯人数は、減少傾向にあり、国連の推計もこの傾向が継続するものとしている。マレーシアにおける民族別の世帯人数は、2010年の人口住宅センサスでは把握できないが、結婚や出生に関するデータ全体から見れば、マレー系の世帯人数はもっとも多いことが考えられる。本調査の回答結果の集計からみた平均世帯人数によると、マレー系、インド系、華人系の順に人数が多かった。

マラヤ大学学生が回答した「希望する子どもの数」には、民族別に大きな格差があり、マレー系が4人以上に対して、華人系、インド系ともに2.5人前後という数であった。そして、これらの数は10年間にわたりあまり変化がないのである。さらに、学生の兄弟姉妹数をみると、ここでもマレー系がもっとも多いことが示されていた。ただし、すべての民族について言えることだが、2012年以降の調査結果からみると、マレー系の兄弟姉妹数も含めて回答者全体の兄弟姉妹数の合計は減少傾向にあった。以上のことから、希望する子どもの数に関する調査結果という限定付きであるが、マレー系のマラヤ大学学生の場合は、少子化とは今のところ無縁のようである。とはいえ、兄弟姉妹数の減少から見ると、マレー系もふくめ学生自身が所属する家族の人数は、減少している傾向がありそうだ。

以上のことから、マラヤ大学学生の結婚と出生に関する意識の調査結果から見る限り、高学歴者においても民族別の結婚や出生に関する格差は継続することが考えられる。マレー系の大学生たちの相対的に若い結婚希望年齢と、彼らが希望する子どもの数が相対的に多いことから考えると、近い将来にわたってマレー系の家族人数ひいてはマレー系の人口が華人系やインド系に対して相対的に多くなるという状況は、高学歴者の家族においても継続するとい

うことが考えられるのである。

## 註

- 1 日本は、2003年に1.29となった。阿藤誠「家族観の変化と超少子化」毎日新聞社人口問題調査会編『超少子化時代の家族意識』2005年。この時点では、韓国や台湾、シンガポール、香港なども、「超少子化国」に分類される。小島宏「アジアの少子化と少子化対策」(店田廣文編『アジアの少子高齢化と社会・経済発展』早稲田大学出版部、2005年)。
- 2 鈴木透「日本・東アジア・ヨーロッパの少子化—その動向・要因・政策対応をめぐって—」『人口問題研究』68巻3号、2012年。
- 3 拙稿「マレーシアにおける若者の結婚と出生に関する意識」『イスラム科学研究』第2号、81-92頁、2005年。
- 4 Gavin W. Jones, The “Flight from Marriage” in South-East and East Asia, *Asian MetaCenter Research Paper Series*, No.11, June 2003.
- 5 嵯峨座晴夫「アジアの人口変動と社会・経済発展」(店田廣文編『アジアの少子高齢化と社会・経済発展』早稲田大学出版部、2005年)。
- 6 United Nations, *World Population Prospects. The 2015 Revision. DVD edition*, July 2015.
- 7 Department of Statistics, Malaysia, *Malaysia Economic Statistics 2013, time series*, n.d.
- 8 アジア経済研究所、「アジア各国・地域 経済統計」『アジ研ワールドトレンド』、2015年9月号。
- 9 Tey Nai Peng, Trends in Delayed and Non-Marriage in Peninsular Malaysia, *Asian Population Studies*, 3-3, 2007, p.244.
- 10 *Ibid.*, pp.246-253.
- 11 *Ibid.*
- 12 Tey Nai Peng, Understanding marriage and divorce trends in Peninsular Malaysia, *Changing Marriage Patterns in Southeast Asia* Jones, G.W.et.al.(eds.), Routledge, 2011.
- 13 Tey Nai Peng, 2007, *op.cit.*, pp.247-248, Table 3.
- 14 Department of Statistics, Malaysia, *Population Distribution and Basic Demographic Characteristic Report 2010* (Updated: 05/08/2011) ;<https://www.statistics.gov.my/>
- 15 この出生に関する項は、以下の拙稿の論述内容をほ

- ばそのまま採用した。拙稿「マレーシアにおける若者の結婚と出生に関する意識」(前掲論文)、84-85頁。
- 16 Tey Nai Peng, Social, Economic and Ethnic Fertility Differentials in Peninsular Malaysia, *Paper presented at IUSSP Conference on Southeast Asia's Population in a Changing Asian Context*, Bangkok, Thailand, 10-13 June 2002
- 17 United Nations, *op.cit.*
- 18 Tey Nai Peng, 2002, *op.cit.* p.17.
- 19 Leete, R. *Malaysia's Demographic Transition-Rapid Development, Culture and Politics*, Singapore, Oxford University Press, 1996.
- 20 Department of Statistics, Malaysia, *op.cit.*
- 21 拙稿「マレーシアにおける若者の結婚と出生に関する意識」(前掲論文)、85-87頁。
- 22 国立社会保障・人口問題研究所、『第12回出生動向基本調査 独身者調査結果の概要』(<http://www.ipss.go.jp/index.html> as of 2005.8.23)